

# 『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

——引用資料を中心に

野村 鮎子

## はじめに

明の万曆末から天啓・崇禎年間にかけて、七子の模擬や公安派末流の浮佻や卑俗に飽き足らぬ思いを抱いていた詩人を引きつけたのは、湖北景陵、かつて竟陵と呼ばれた土地から興った鍾惺（一五七四～一六二五）や譚元春（一五八六～一六三七）の詩であった。とりわけ彼等が評選した『唐詩歸』『古詩歸』は一世を風靡した。

しかし、後世の明文学史観では竟陵派はその地位を逐われてしまう。たとえば、『四庫全書総目提要』は、竟陵派が公安派の「織佻之弊」を受けついで、「尖新（新奇さ）」と「幽冷（うす暗くひんやりした感じ）」を喧伝して人心を惑わし、明の国運を傾けるに至ったと断罪し<sup>1</sup>、四庫全書は鍾惺や譚元春の別集は

もとより、あれほど流行した『唐詩歸』さえも収録していない。<sup>2</sup> 竟陵派に対する負の評価を決定づけ、後世に大きな影響を与えたのが錢謙益（一五八二～一六六四）の『列朝詩集小伝』（以下、『小伝』）であったことはよく知られている。

錢謙益の竟陵派への批判の辞は『小伝』の随所に散見されるが、その中心となるのは「鍾惺伝」とその「附見」である。「譚元春伝」、さらに譚元春詩の後に附加された論評（以下「論譚元春詩」）である。特に「譚元春伝」と「論譚元春詩」には、同時代人の竟陵派批判の語が複数引用されているほか、錢謙益が反論を目的として竟陵支持者の言を引用した箇所もある。そして、その中には錢謙益が原資料の文章を恣意的に改変したものである。

本論では『小伝』本文の引用文とその原資料とを比較参照し

つつ、『小伝』における竟陵派批判の構造について検討したい。<sup>3)</sup>  
 なお、『小伝』の原文は特に断らない限り、許逸民・林淑敏点校『列朝詩集』全十二冊本（中華書局二〇〇七年）に拠った。

## 一、竟陵派批判の論点

まず、『小伝』における竟陵派批判の全体的な構成を確認しておく。竟陵派と公安派の関係を概括的に述べているのは、『袁宏道伝』である。

中郎之論出、王・李之雲霧一掃、天下之文人才士始知疏淪心靈、搜剔慧性、以蕩滌摹擬塗澤之病。其功偉矣。機鋒側出、矯枉過正、於是狂瞽交扇、鄙俚公行、雅故滅裂、風華掃地。竟陵代起、以淒清幽獨矯之、而海內之風氣復大變。譬之有病于此、邪氣結轡、不得不用大承湯下之。然輸瀉太利、元氣受傷、則別症生焉。北地・濟南、結轡之邪氣也。公安、瀉下之劫藥也。竟陵、傳染之別症也。

〔『列朝詩集』丁集卷十二「袁宏道伝」〕

袁中郎宏道の論が登場すると、王世貞や李攀龍の雲霧が一掃されて、天下の文人才士はそれで始めて心靈を洗い清め、知性を追求することを知り、摹倣と塗飾の病を洗い流すことができた。その

功績は偉大である。しかし攻撃の切っ先が横に飛び出て、枉を矯すこと正しきに過ぎた。それで無知蒙昧が煽り立てられ、粗野や卑俗が公にまかり通るようになり、『詩経』以来の伝統的な雅正は滅び、風華も地を払うありさまになった。竟陵派はこれに代って登場し、淒清幽独でもってこれを矯め、海内の風気が再び大きく変化した。これを病に譬えると、邪氣が凝り固まって、下剤を用いて下さざるを得なかったが、効目が強すぎて元氣が損なわれたので別の症状が現れたようなものだ。北地の李夢陽・濟南の李攀龍は凝り固まった邪氣であり、公安は効目の強い下剤、竟陵は伝染による別の症状である。

七子の擬古への批判勢力として興った公安派が末流になると卑俗に墮し、それに代わって興ったのが竟陵派の「淒清幽独」であったこと、ところが七子の宿痾を流さんがための葉が効きすぎて、却って氣を傷つけ、そこから伝染による別の症状を引き起こしたようなものだというのが、『小伝』における竟陵派の文学史的な位置づけである。

「袁宏道伝」がいう「淒清幽独」は、「鍾惺伝」では「深幽孤峭」という言葉で説明される。それは伝染力の強いもので、万曆の末年から天啓・崇禎年間の流行となった。

其所謂深幽孤峭者、如木客之清吟、如幽獨君之冥語、如夢而入鼠穴、如幻而之鬼國、浸淫三十餘年、風移俗易、滔滔不返。

(丁集卷十二「鍾惺小伝」)

その所謂深幽孤峭とは、山中の野人の吟詠のようであり、幽獨君の鬼詩のようであり、夢の中で鼠穴に入るよう、幻の中で鬼國に行くようなものである。こうした詩風が妄りにはびこって三十余年、風氣が移り習俗も変わり、その流れはもはや戻すことのできぬものとなった。

こうした批評の語は、崇禎末年に刻された錢謙益の『初学集』にすでに見えている。「萬曆の季、詩を稱する者は、淒清幽眇を以て能と爲し、古人の終始を鋪陳し、聲律を排比する者に於いては、皆な訾警抹撥し、以て陳言腐詞と爲す。海内靡然として之に従い、今に迄るまで三十餘年、甚だしいかな、詩學の舛<sup>あやま</sup>てるや」(卷三十一「劉司空詩集序」とあるのがそれである。

さらに『小伝』は、竟陵派の詩を不吉な「鬼趣」「兵象」であるとする。

余嘗論近代之詩、抉擿洗削、以淒聲寒魄爲致、此鬼趣也。尖新割剝、以噍音促節爲能、此兵象也。鬼氣幽、兵氣殺、著見于文章、而國運從之。以一二輕才專學之士衡操斯文之

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

柄、而徵兆國家之盛衰、可勝嘆哉、可勝悼哉。(鍾惺小伝) 私は嘗て近年の詩について論じたことがある。詩句を抉り削りだし、淒淒たる風雨や寒々とした月を詩の極致とするのは、鬼趣である。新奇を求めて古人の句を剥ぎ取り、急迫でつづまった音を上手い作だとするのは、兵象である。鬼の幽氣や兵の殺氣が詩文に顕われるようになって、明の國運もこれに随って傾いた。一二の淺才不學の士が文學の領袖として詩文の柄を握り、そしてそれが國家の衰亡の予兆となったのは、なんと嘆かわしいことよ、なんと痛ましいことよ。

ここでいう近代の詩について錢謙益がかつて論じた文とは、『初学集』卷三〇「徐司寇画溪詩集序」を指す。「萬曆の末自り以て今に迄るまで、文章の弊は滋ます極まり、而して闍寺・鈞黨・兇裁・兵燹の禍、亦た相い挺して作る。嘗て近代の詩を取りて之を觀るに、清深奧僻を以て致と爲す者の、蚓竅に鳴くが如く、鼠穴に入るが如く、淒聲寒魄なるは、此れ鬼趣なり。尖新割剝を以て能と爲す者の、假面を戴くが如く、胡語を作すが如く、噍音促節なるは、此れ兵象なり。鬼氣の幽、兵氣の殺、文章に著見し、而して氣運之に従う」。

これらは、宦官の跋扈、党争の激化、災害の頻発、對外戦争

といった万曆以降の禍と詩における竟陵の詩の流行を関連づけた議論である。そのため、明の滅亡が現実のものとなって以後に成立した『小伝』では、そこに竟陵詩を亡国の詩妖とみなす論が新たに加わっている。

唐天寶之樂章、曲終繁聲、名爲入破。鍾・譚之類、豈亦『五行志』所謂詩妖者乎。〔鍾惺小伝〕

唐の天宝年間の樂章で、曲の最後が浮ついで騒々しいものには、入破という不吉な名がついていた。鍾・譚の類は、『五行志』でいうところの詩妖ではなからうか。

天喪斯文、餘分閏位、竟陵之詩與西國之教・三峰之禪、旁午發作、并爲孽於斯世、後有傳『洪範五行』者、固將大書特書著其事應、豈過論哉。

〔丁集卷十二「鍾惺伝附見譚元春小伝」〕

本来あるべき学問が失われ、正統でないものが位を得て、竟陵の詩と西洋の基督教・三峰の禪とがいたるところで興り、世に禍をなした。後世、『洪範五行』に注釈する者が、これを然るべくして起こった災異として大書特書するのは、間違いなからう。

三峰の禪とは、明末から清初にかけて江浙、湖南一帯に流行した臨済宗の一派である三峰宗派のことで、漢月法蔵（一五七三

一六三五）が常熟の三峰山にて悟りを開いたことからこの名がある。当初、錢謙益は漢月法蔵を尊崇していたが、漢月法蔵には禪門師承の問題もあり、漢月法蔵の没後は批判に転じていた。『列朝詩集』は入清後の順治六年（一六四九）に完成し、順治九年（一六五二）に刻行された書物であるが、錢謙益は明滅亡の原因を詩では竟陵詩派、宗教では三峰宗派と基督教に求めたのである。

竟陵派の詩が「亡国の音」「詩妖」であったという見方は、竟陵派に与せぬ立場からの後附けの議論ではある。しかし、この説は朱彝尊や王夫之など清初の文人たちに広く受け入れられ、後の竟陵派評価に影響を及ぼした。<sup>7</sup>

『小伝』の竟陵派批判のもう一つの焦点は、鍾惺・譚元春評選の『詩歸』である。誤謬が多い書であるにもかかわらず、世間でもてはやされていることが批判の理由とされた。

所撰『古今詩歸』盛行於世、承學之士家置一編、奉之如尼丘之刪定。而寡陋無稽、錯繆疊出、稍知古學者咸能挾策以攻其短。『詩歸』出而鍾譚之底蘊畢露、溝澮之盈於是乎涸然無餘地矣。〔鍾惺小伝〕

彼等による『古詩歸』『唐詩歸』が世に盛行し、その詩学に従う

人士の家はすべてこれを置いて、孔子の刪定の書物のように奉じた。しかしその説は見識が狭く根拠も無く、誤謬に満ち、少しでも古学を知る者はみな書物を手にその短所を指弾した。『詩帰』が出たことで鍾・譚の底の浅さが露わになったが、それはまるで敵の間のわずかな水さえも余す所なくすべて干上がったしまったようなものだ。

『詩歸』之作、金根繆解、魯魚訛傳、兔園老學究皆能指其疵陋、而舉世傳習奉爲金科玉條、不亦悲乎。

(鍾惺伝附見 譚元春小伝)

『詩帰』の作は、金根車を金銀車と臆断したり、魯と魚の字を誤る類の誤りがあり、田舎の塾の老書生でも誤謬を指摘できる程度のものだ。なのに、世はこぞってこれを習い伝えて金科玉条のようにみなしている。なんと悲しいことよ。

錢謙益の周辺には『詩帰』の誤謬を指摘する者が多かったよ  
うで、錢謙益が所謂「海虞の二馮」の一人、馮舒のために書いた「馮已蒼詩序」(『初学集』卷四十)には、「近世の『詩帰』の、錯解別字の若きは、一一舉正す。賓筵客座、辯論鋒起し、古を援きて今を證し、尾を矯けて角を厲し、自ら以て馮氏一家の學は、論者以て難ずる無しと爲すなり」とあり、馮舒らが『詩帰』

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

の誤謬を友人たちと論じていたことがわかる。また錢自身も「姚叔祥過明発堂共論近代詞人戲作絶句十六首」(『初学集』卷十七)の其十五首で、「唐詩帰」に宋の朱熹の詩が混入していることを誇っている。『詩帰』の校訂の不味さは、反竟陵派の人士にとって格好の標的だった。

特に錢謙益を刺激したと思われるのが『唐詩帰』の杜甫詩の選録基準である。

舉古人之高文大篇鋪陳排比者、以爲繁蕪熟爛、胥欲掃而刊之、而惟其僻見之是師。

(鍾惺小伝)

古人の堂々とした名篇巨篇を蕪雜で爛熟冗漫なものと見なしてすべてを削去し、ただ自らの僻見のみを宗旨とした。

「鋪陳排比」は元稹が杜甫の墓誌銘で「終始を鋪陳し、聲律を排比するが若きに至りては、大なるは或いは千言」と讚えたのに基づく言葉で、長篇巨篇を指す。そもそも『唐詩帰』はこれまでの唐詩選と一線を画さんがため、独特の選録基準を設けており、従来あまり注目されてこなかった中晩唐の詩人を多く収録する一方で、たとえば、駱賓王「帝京篇」、盧照鄰「長安古意」、楊炯「從軍行」、李白「蜀道難」「將進酒」、杜甫「登高」、白居易「長恨歌」や元稹「連昌宮詞」などの著名な長篇詩を採

録していない。

こうした選詩基準には公安派からも異論が提出された。「袁中道伝」によれば、袁は錢に向かつて、「杜の『秋興』、白の『長恨歌』、元の『連昌宮詞』は、皆な千古の絶調にして、文章の元氣なり。楚人何をか知りて、妄りに評竄を加えん」と不満を漏らし、「吾れと子と當に昌言撃排し、手眼を點出し、後生をして彼の雲霧に墮ちしむる無かるべし」として、竟陵派攻撃の列に加わるように彼を誘ったという。

「秋興八首」の作を「今に至るまで人をして流涕せしむ」(『初学集』卷四十「南征吟小引」として、特に愛した錢謙益の立場からいえば、『唐詩帰』が八首のうちの一首しか収録していないことは許しがたいものに映ったであろう。

八首のうち一首しか収録しなかった理由について、『唐詩帰』卷二十二の鍾惺の評は次のように説明する。「秋興」は偶然八首なるのみ。八を必するに非らざるなり。今人の詩「秋興」に擬するは已に非なり、況んや其の「秋興」爲る所を捨てて専ら八首に盈たすを取るをや。胸中に八首有らば便ち復た「秋興」無し、杜の至處は「秋興」に在らず、「秋興」の至處も亦た八首を以てするに非ざるなり。譚元春もまた同じ卷二十二の杜

甫の七律「覃山人隱居」の評で、「此れ老杜の眞の本事にして、何ぞ即ち此くの如く律を作らずして、乃ち「秋興」・「諸將」の作を爲り、徒らに氣力を費し、識者の一番の周旋を煩わせんや」とし、七言律詩の連作は冗漫になりがちだと主張している。

これを受けて、錢謙益は『錢注杜詩』卷十五で、「此の詩は一事疊ねて八章と爲す、章は八有り」と雖も、重重鉤攝し、無量の樓閣の門在る有り」と、八首は互いに重なり合うことで一つの世界を構成するのだと反駁しており、まるで竟陵派の説に對抗するかのよう、「秋興八首」の韻を用いた十三疊一百四首からなる大作「金陵秋興八首次草堂韻」(『投筆集』)を制作している。

錢謙益が崇禎六年臘月(西暦では一六三四年十二月)に盧世澐にあてた「読杜詩寄盧小箋」は、後の『錢注杜詩』の先駆けとなるものであるが、その「自序」(『初学集』卷一百六「読杜小箋(上)」所収)で、錢は古文辞派による杜甫詩の模擬を批判した後、これまで杜甫詩のスタンダードとして尊ばれてきた劉辰翁の注を次のように評している。

辰翁之評杜也、不識杜之大家數、所謂鋪陳終始、排比聲韻者、而點綴其尖新雋冷、單詞隻字、以爲得杜骨髓、此所謂

一知半解也。…近日之評杜者、鉤深抉異、以鬼窟爲活計、此辰翁之牙後慧也。

辰翁の評注ときたら、杜詩が大いなる詩の宗家だということをおぼろげに感ぜず、いわゆる終始を鋪陳し、声律を排比した巨篇について、一風変わった意味深長な解釈や片言隻語の評語を添えることで杜甫の骨髄を得たかのように思っている。これはいわゆる一知半解である。…最近の杜詩を評述する者は奥深いところから奇異なものを選び取ってきて、亡者の巢窟を新しい工夫であるかのようにみなしている。これは辰翁の受け売りである。

「鬼窟を以て活計と爲す」は明らかに竟陵派の『唐詩歸』に對する微辞である。ここで竟陵派の『唐詩歸』は、劉辰翁評と同類のものとして斥けられている。<sup>11</sup> 錢謙益は鍾惺の死（一六二五）から八年後、譚元春が在世の時期である崇禎六年臘月（一六三三）の段階で、竟陵派の詩学に不満を漏らしていたことになる。

## 二、鍾惺批判と譚元春批判の差異

後世、竟陵派としてひとくくりで論じられがちな鍾惺と譚元春であるが、実際には『小伝』の両者に対する批判には微妙な差異が認められる。批判の言は譚元春に対してより苛烈であり、<sup>12</sup>

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

同時代人による竟陵批評の語も主に「譚元春伝」と「論譚元春詩」とに集中的に引用されている。この章では鍾惺批判と譚元春批判の差異について見ておこう。

錢謙益は鍾惺の詩風に譚元春が応和したことで竟陵派が誕生したとみなす。

伯敬少負才藻、有聲公車間。擢第之後、思別出手眼、另立深幽孤峭之宗、以驅駕古人之上。而同里有譚生元春、爲之應和、海內稱詩者靡然從之、謂之鍾譚體。（鍾惺小伝）

鍾伯敬は若い頃から文才があり、科擧受験生の間で名が知られていた。及第後は、独自の見方と手法を採り、深幽孤峭を宗として古人の上を行こうとした。そこへ同郷の譚元春が応和し、海内の詩をいう者はそれになびき従った、これを鍾譚体という。

『小伝』が鍾惺の詩風を「深幽孤峭」としたことは、第一章で上述したとおりであるが、譚元春の詩はそれをさらに墮落させたものとして決めつけられている。

譚之才力薄於鍾、其學殖尤淺、讓劣彌甚、以俚率爲清真、以僻澀爲幽峭。作似了不了之語以爲意表之言、不知求深而彌淺。寫可解不解之景以爲物外之象、不知求新而轉陳。無字不啞、無句不謎、無一篇章不破碎斷落。一言之内、意義

違反、如隔燕・呉。數行之中、詞旨蒙晦、莫辯阡陌。原其初、豈無一知半解、遊光掠影、居然謂文外獨絶、妙處不傳、不自知其識之墮於魔、而趣之沈於鬼也。已而名日盛、遊日廣、識下而心粗、膽張而筆放、遂欲秤量古今、牢籠宇宙。

〔鍾惺伝附見 譚元春小伝〕

譚の才力は鍾より劣り、その学殖はとりわけ浅く、浅薄低劣なること甚だしい。野卑であけすけなものを清真とみなし、僻澁を幽峭だとした。わかるようわからぬ詩語を意表を突いた語だとし、深奥を求めていよいよ浅薄になっていることに気づかない。わかるようわからぬ風景を写して超俗の境地だとし、新奇を求めていっそう陳腐になっていることに気づかない。字は読むのに詰まり、句は謎だらけ、一篇としてのまとまりがなく支離滅裂である。一言の内でも、燕と呉のように意味がかけ離れて相反している。數行の中、道に迷うように詞の意味も判別できない。その初めを尋ねるに、一知半解、うわべだけの浅薄な学問にすぎないのだ。それなのに、なんと「尽きせぬ意は言外に現れ、妙処は言葉では伝えられない」などと言って、その識見が魔に墮し、興趣が鬼に沈んでいることに自ら気づかない。そうこうしているうちに名声は日び盛んに、交遊は日び広くなっていき、知性は劣って粗忽に

なり、大胆になって筆も放縱になり、かくて古今の詩を品評して、自らの檻の中に広い宇宙を閉じ込めようとしたのだ。

鍾惺が目指したところを「俚率」「僻澁」に変えてしまったのが譚元春だというのである。錢謙益にとっては、譚元春は鍾惺の追隨者に過ぎない。そのため、『列朝詩集』では「譚元春伝」は「鍾惺伝」の「附見」に過ぎない。

『小伝』によれば、譚元春の「俚率」と「僻澁」は、さらに不学の追隨者を生んだ。

承學之徒莫不喜其尖新、樂其率易、相與糊心眯目、拍肩而從之。以一言蔽其病、曰不學而已。亦以一言蔽從之者之病、曰便於不說學而已。

〔鍾惺伝附見 譚元春小伝〕

追隨する徒は、その新奇さを喜び、その手軽さを楽しまない者はなく、お互い何も考えずに惑わされて、肩をたたきあってこれに従った。一言でその病をいうならば、不学というのに尽きる。また一言でそれに従った者の病をいうならば、学問を説かないのを好都合とみなしただけだ。

『列朝詩集』は譚元春の詩を五首選録した後、さらに「論譚元春詩」を付け加えている。その冒頭は、譚元春詩への痛烈な詆排から始まる。<sup>13</sup>



友夏詩、貧也、非寒也。薄也、非瘦也。僻也、非幽也。凡也、非近也。昧也、非深也。斷也、非掉也。亂也、非變也。

(丁集卷十二「譚元春詩評」)

譚友夏の詩は貧弱なのであって寒ではない。薄っぺらなのであって瘦ではない。僻渋なのであって、幽寂なのではない。凡庸であって、身近というのではない。蒙昧なのであって、深淵なのではない。単なる切断であって、掉脱なのではない。乱調であって、変体なのではない。

『小伝』はこの後、具体的に譚元春の「擬読曲歌」全四十六首の其四十四と「夏夜古意」を例に挙げて「何ぞ其の淫哇卑賤なるや」といい、「隋大業十一年鑊歌」を挙げて「何ぞ其の俚なるや」といい、「橋上聽青羊澗」を挙げて「經義を用うること何ぞ其の繆なるや」といい、「寄吳康貞」「姑蘇舟中」「碧雲寺麗甚題之」「喜李長蘅至」の句を引いて「何ぞ其の鄙にして倍けるや」という。さらに、譚元春のみならず、竟陵派の末流として閩の蔡復一、字は敬夫の詩句を引いて、これを延々とあげつつらっている。

ところが一方の鍾惺については、「鍾の才は固り譚に優れり。「江行俳體」は、其の公車に赴くの作なり、蜀に入る諸詩は、

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

其の初めて第するの作にして、習氣未だ深からず、聲調猶ほ在り、余得て采りて之を録す」(鍾惺小伝)として、鍾惺が独自の詩論を展開し始めたのは登第後であって、科挙受験に赴いた際の詩や、登第直後の詩にはまだ見るべきものもあるという理由で、計二十六首を選録している。

錢謙益は鍾惺と同じ万曆三十八年(二六一〇)の進士である。鍾惺は三十七歳、錢謙益は二十九歳での及第であり、鍾惺の方が年長である。それぞれ党派を異にするとはいっても、同年生としての好や年長者への遠慮もあつたはずである。さらに錢謙益は鍾惺の紹介で、譚元春ともつきあいがあつた。錢謙益が最初から彼らに悪感情を抱き、竟陵批判に積極的だったわけではないことは『小伝』にも明言されている。

伯敬爲余同年進士、又介友夏以交于余、皆相好也。吳中少俊、多訾警鍾・譚、余深爲護惜、虛心評騭、往復良久、不得已而昌言擊排。(鍾惺伝附見 譚元春伝)

鍾伯敬は私の同年の進士であり、さらに譚友夏を私に紹介したことで彼と交際するようになり、私は両方と仲が良かった。吳の少俊による鍾・譚への誹謗中傷にも、私はそれを極力庇ってきたのだが、虚心坦懐にその詩を評騭し、意見をかなり交換した後で、

已むを得ず忌憚なく竟陵を排撃するようになったのだ。

今、鍾惺の『隱秀軒集』を見るに、沈春沢（鍾惺の没後『隱秀軒集』を出版した人物）が錢謙益の書簡を携えてきたことを詠んだ詩「沈雨若自常熟過訪九月七日要集敝止有虞山看紅葉之約時喜得錢受之書」（万曆四十八年作、卷八）や二度も訪ねてきてくれたのに会えなかったことを詫びた「喜錢受之就晤婁江先待予只門不值」（卷十二）が収められており、前者は『列朝詩集』にも選録されている。

一方、錢謙益は鍾惺に寄せた詩を『初学集』に一首も收入していない。唯一、鍾惺の名が詩題に入った「戲題徐元歎所感鍾伯敬茶訊詩卷」（『初学集』卷九）があるが、これは鍾惺の没後の崇禎四年（一六三〇）に、錢が友人徐波<sup>14</sup>（一五九〇～一六六三）の胸中を汲んで作った詩である。左に書き下しのみをあげる。

鍾生の詩を品ずるは茶を品ずる如し

龍團 月片 百て愛<sup>すべ</sup>で<sup>め</sup>ず

但だ愛す 幽香にして餘澀の齒牙に留まるを

徐郎 茶を嗜み 又た鍾生の詩を嗜む

微吟 短詠 爬癢の處

恰かも是れ盧全の飲みて搜腸破悶に到る時のごとし

鍾生逝けり 徐郎 慟す

吟詩 啜茶 誰か與に共にせん

この詩は鍾惺と親しかった友人を慰めるものとはいえ、錢謙益は鍾惺の品詩に対する厳しい態度や、その幽にして澀という詩風を全面否定していないことがわかる。

では、錢謙益はいつごろ竟陵批判に転じたのか。

袁中道の没年は天啓三年（一六二三）なので、袁中道から竟陵詩をともし「昌言擊排」しようとする誘われたのはそれ以前のことである。そのころ鍾惺はまだ在世中ということもあり、錢謙益には進士同年生でもあった鍾惺を攻撃する意思はなかった。

少なくとも右の詩が書かれた崇禎四年（一六三二）までは彼のこの態度を保っていたと考えられる。しかし、それから二年後、崇禎六年の「誦杜詩寄盧小箋」では『詩歸』への批判を露わにする。たとえ各地の詩人と幅広く交遊していたとはいえ、一介の挙人でしかない譚元春が楚調の孤壘を守るのは難しかったであろう。譚元春が礼部の試験に赴く途中、北京から三十里の長店で亡くなったのは、崇禎十年（一六三七）、鍾惺の死におくれること十二年であった。鍾惺も譚元春も鬼籍に入った後の崇禎十三年（一六四〇）、錢謙益は「姚叔祥過明發堂共論近代詞人戲

作絶句十六首」(『初学集』卷十七)の其十一首で、「王微楊宛爲詞客、肯與鍾譚作後塵(王微 楊宛は詞客爲るも、肯ぞ鍾譚の後塵と作らんや)」と詠じた。この詩は戯作とはいえ、明末の歌妓の王微や楊宛ですら鍾譚の後塵を拝していないと、竟陵詩を歌妓のレベルにまで貶めたのである。

竟陵の出身で、後に『竟陵詩選』や『竟陵文選』を編纂した清の熊士鵬は、「書退谷先生詩集後」(『鶴山小隱文集』巻八)に、「錢虞山は、才人なり。嘗て吾が邑の鍾退谷先生と善し。退谷の舟車江南に到るを聞く毎に、先ず月を踰えて江干に候望し、退谷の至るを俟ちて、始めて手を携えて去れり。退谷の歿するに及び、虞山乃ち大いに肆ほしまゝに排誡するは、則ち何の心ならんか」といい、錢謙益の変心に対する恨みを吐露している。

錢謙益が鍾惺に対する評価を一変させるに至った要因については、これまでもさまざまな説が唱えられている。明末、彼らが属していた政治派閥間の党争が原因だとする説10や、錢は鍾惺の生前には政治闘争の中にあり、官籍を削られて郷里に帰った天啓四年(一六二四)以後、ようやく文学流派の闘争に目を向けたのだという見方10や、そもそも鍾惺についての錢謙益の一見矛盾するかのような態度は、文学評論という「公領域」と個

人の情感などの「私領域」という二つの側面から考えるべきだとする意見もある17。

論者は、次章にとりあげる呉の文人達の存在が大きいと考え、その問題はひとまずおいて、ここでは譚元春と錢謙益の二人の別集には互いの贈答詩はもとより往復書簡も収められていないこと、竟陵派批判が「鍾惺伝」よりも「論元春伝」や「評譚元春詩」に集中していることを強調しておきたい。

### 三、「譚元春伝」「論譚元春詩」引用資料

「譚元春伝」と「論譚元春詩」には、批判を含めて竟陵派をめぐる同時代人の評語が多く引用されている。この章ではその引用と原資料の文を比較検討する。

#### (1) 程嘉燧「程茂桓詩序」

まず最初に「譚元春小伝」の最後に引用される、程嘉燧(一五六五―一六四四)の言葉を取りあげる。

吾友程孟陽之言曰、「詩之學、自何・李而變、務於模擬聲調、所謂以矜氣作之者也。自鍾・譚而晦、競於僻澀蒙昧、所謂以昏氣出之者也。」(鍾惺伝附見 譚元春小伝)

右の文は、次の程嘉燧「程茂桓詩序」(『耦耕堂集』文卷上)か

らの引用である。

李長沙懷麓堂詩刻於新安、卓然詩家正派、而後生罕有見之者。蓋詩之學自何・李而變、務于摹擬聲調、所謂以矜氣作之者也。自鐘・譚而晦、競于僻澀蒙昧、所謂以昏氣出之者也。

新安で刻された李東陽の懷麓堂詩集は、すぐれた詩家の正流であるにもかかわらず、後学の者でこれを見る者は罕である。思うに詩学は何景明・李夢陽で一変し、前人の作の模倣に務めるようになった。いわゆる矜気―傲慢な態度による創作である。鐘・譚からは晦くなり、僻澀と蒙昧を競うようになった。いわゆる昏気―混濁した考えによる創作である。

「矜気（傲慢）」と「昏気（混濁）」とは、柳宗元が詩文を創作する際の心構えを述べた「答韋中立論師道書」に見える言葉である。程嘉燧は、古文辞による唐詩の模倣は「矜気」、竟陵の僻澀は「昏気」による創作だとした。

程嘉燧は字を孟陽といい、号は松円詩老または偈庵。安徽休寧の人だが、嘉定に僑居したことから、李流芳・唐時升・婁堅と合わせて嘉定の四先生と称される。王士禎『漁洋詩話』巻下はその詩について、「明末の七言律詩に兩派有り。一は陳大樽

（陳子龍）爲り、一は程松圓爲り。……松圓は劉文房（劉長卿）・韓君平（韓翃）を學び、又時時陸務觀に染指す」と評している。錢謙益よりも二十近く年上の程嘉燧は、錢謙益の詩学思想に大きな影響を与えた。<sup>18</sup>『列朝詩集』丁集卷十三之上には長文の「程嘉燧伝」と、彼の詩集である『浪淘集』の詩一百四十五首、『耦耕堂集』の八十首が採録されている。しかも詩には二つの詩集の自序も附せられている。これは『列朝詩集』の中でも破格の扱いといえる。<sup>19</sup>

程嘉燧と錢謙益は、かつて『列朝詩集』の萌芽ともいうべき『国朝詩集』をともに編纂した仲であり、そのことは「列朝詩集序」にも明らかにされている。

録詩何始乎。自孟陽之讀『中州集』始也。孟陽之言曰『元氏之集詩也、以詩繫人、以人繫傳。中州之詩、亦金源之史也。吾將傲而爲之、吾以采詩、子以庀史、不亦可乎』山居多暇、撰次『國朝詩集』、幾三十家、未幾罷去。此天啓初年事也。 【『有學集』卷十四】

詩の輯録が何から始まったかという点、程孟陽が『中州集』を読んだことがきっかけだった。程孟陽が「元遺山の集詩では、詩を詩人別に収録し、詩人に伝をつなげている。『中州集』の詩は金

国の歴史でもあるのだ。私はこれに倣うものを作ろうと思う、私は采詩をするので、君は史を整理するというのはどうだろうか」と言ったのだ。隱居の身で暇があるので、『国朝詩集』を撰次し、三十家近くになったが、幾くもせずして中断した。これが天啓初年の事である。

程嘉燧が初めて錢謙益の常熟の弘水荘を訪れたのは万曆四十五年（一六一七）のことである。そこで意気投合した二人は以後、親しく交わるようになり、崇禎三年（一六三〇）、ついに程嘉燧は錢が建てた耦耕堂に居を移した。

錢謙益の詩について、瞿式耜「牧齋先生初学集目錄後序」は、「杜・韓を以て宗と爲し、而して香山・樊川・松陵」に出入し、以て東坡・放翁・遺山の諸家に追おぼぶ」といい、また毛奇齡『西河詩話』も「宗伯は素り宋人の詩は當に務觀を學ぶべしと稱す」というが、錢のこうした陵游詩愛好も程嘉燧からの感化によるものであった。そのことは、錢自身が「蕭伯玉春浮園集序」〔『有学集』卷十八〕に「天啓の初め、余は長安に在りて伯玉愚山の詩を得たり、其の煉句の放翁に似るを喜び、寫して扇頭に置く、程孟陽之を見て、相い向いて吟賞して口を去らず」といい、また「復遵王書」〔『有学集』卷三十九〕に「孟陽の論詩は、

初盛唐自り錢・劉・元・白の諸家に及び、析骨刻髓ならざるは無く、尚お未だ能く六朝以上に及ばず。晚に始めて放ちて劍川・遺山に之く。余の津涉も、實に之と與に相い上下す」と語っていることから知られる。

## (2) 錢継章「序友夏」

錢謙益が生きた明末清初にあっては、竟陵派は依然として一定の影響力を有していた。ここで注目したいのは、「譚元春小伝」が竟陵支持者の意見をその名を明らかにしないまま、「世之論者」の説として引用し、それに批判を加えている箇所である。

世之論者曰、「鍾・譚一出、海内始知性靈二字。」然則鍾・譚未出、海内之文人才士皆石人木偶乎。曰、「極七子之才致、不過爲宋之陸放翁。」自南渡以迄隆・萬、將五百年、亦皆石人木偶、而性靈獨培發於鍾・譚乎。

（鍾惺伝附見 譚元春伝）

世の論者は、「鍾・譚一たび出でて、海内始めて性靈の二字を知れり」という。ならば、鍾・譚が登場しなかった時、海内の文人才士は皆な石人木偶だったともいうのか。また、「七子の才致を極むるも、宋の陸放翁爲るに過ぎず」ともいう。南宋から明の

隆慶・万暦年間にいたるまで五百年にならんとするが、詩人はみな石人木偶で、性靈がただ鍾・譚から突然飛び出したとでもいえるのか。

「世之論者」の言である「鍾・譚一出、海内始知性靈二字」と「極七子之才致、不過爲宋之陸放翁」は、二つとも錢繼章編『人琴集』所収の譚元春『鵲灣遺稿』一卷に冠せられた「序友夏」からの引用である。

錢繼章（生卒年未詳）は、字を爾斐、号を菊農といい、浙江嘉善の人。明崇禎九年（一六三六）の挙人。復社の同人で、清には出仕しなかった。柳州詞派の詞人でもある。錢謙益と姓を同じくするが、同族ではない。『人琴集』七卷は同時代の七人の詩人の遺稿を一卷ずつ編刻したもので、譚元春『鵲灣遺稿』一卷、卜舜年『石林西墅遺稿』一卷、閔衷『裴村遺稿』一卷、積智舫『黄葉庵遺稿』一卷、潘炳孚『珠塵遺稿』一卷、劉芳『清喚齋遺稿』、魏学洙『素水居遺稿』一卷から成る。

譚元春の主な詩文集としては、すでに崇禎六年刻『新刻譚友夏合集』のほか、崇禎十一年刻『譚友夏遺集』、崇禎十二年刻の『岳婦堂遺集』があった。一方、『人琴集』は伝本が極めて罕で、当時に在っても広く流布していた書物とは思えないのだ

が、錢謙益は『列朝詩集』編纂のため、こうした明詩の総集を広く集め、それを丁寧参照していたことになる。

さて、『人琴集』中の卜舜年・閔衷・積智舫は錢繼章とかつて交遊があった詩人で、潘炳孚・劉芳・魏学洙は彼の同邑の詩人である。六人は彼の知己といえる。しかし、唯一譚元春だけは異なる。「序友夏」に「呉山楚水、久しく參・辰を恨む。丙子に肩僕して都に入るに迫び、必ず望見を得んと謂うに、則ち友夏は已に數日を先んじて旅店に殤せり。（一方は呉、一方は楚で、參星と辰星のように二人の居るところは離れている。崇禎九年、ともに礼部の試験で都に上ることになり、必ず友夏に会えると思っていたのに、彼はその數日前に旅店で亡くなってしまった）」とあるように、錢繼章は譚元春と生前交遊があったわけではない。にもかかわらず、錢繼章は譚元春への敬慕の念を示すため、譚の『鵲灣遺稿』を『人琴集』の巻頭に置き、竟陵派への左袒を宣言した。「序友夏」は次のようにいう。

今之言詩者、皆曰、「竟陵門戸倒矣、香煙舊矣」。浮薄之子、異喙同聲、即向所仰首師事者、亦復翻然迴矛、詆訾交劇。……即如文章一途、陳隋滯響、縱燕許猶未脫然。逮乎昌黎、廓清始偉。踵昌黎之後者、或爲皮日休・陸龜蒙之輕清、或爲

歐陽永叔・蘇子瞻之浩瀚。縱未追躡、差足頡頏。……明興之詩、高・何以下、大都爲琢辭敦格之業、嘉隆七子式廓前緒、海內靡然同風、觀其顧盼瓌璋、葩藻斐然、亦一時傑構、然極其才致、不過爲宋人、爲宋人之陸放翁、佳亦止矣。鍾譚一出、海內始知性靈二字。如頌麗人者、詠其結帶延佇、恨滿斜陽、不云螭首蛾眉、倭璫織縠。如游佳山水者、言其杳冥汨沒、幽妙悶冲、不云重嶺垂霞、迭泉霏雪。亦足開千古之勝胸、資萬人之目福矣。

今の詩を論じる者は、皆な「竟陵派の門戸は倒れて、竟陵に捧げる香煙も古びた」という。浮薄子は異口同音にこう言うが、それは昔、首根っこを押さえつけられて師事していた連中が今度は翻然と予先を変え、激しく罵っているのだ。……文学の道についていえば、陳や隋の停滞した詩風は、たとえ初唐の張説や蘇頌でもそれを脱却することはできなかった。韓愈になって、それがきっぱりと除かれたのは素晴らしい。韓愈の後に続いたのは、皮日休や陸龜蒙の軽快な詩風であり、あるいは歐陽脩や蘇東坡の博大精深である。それらは韓愈の後継といえないにせよ、やや頡頏はしている。……明が興ったばかりの頃の詩は、高啓・何景明以下、おおむね辞藻の琢磨と格調を厚くすることにとめていた。嘉靖・

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

隆慶の七子は前人を紹述し、海内の人士は靡然としてこれに同調した。他を睥睨する優れた才能や辞藻のきらびやかさを観るに、これも当時の傑出したものではある。しかし、彼らの才致を極めたとしても、せいぜいが（唐ではなく）宋人どまりで、それも宋人の陸放翁では、良さもそのレベルに止まる。鍾・譚が現れたことで、海内の人士はようやく性靈の二字を知ったのだ。たとえば麗人を贊美するのに、螭首や蛾眉、倭璫や織縠といった表面的な描写をせず、麗人が帯を結んだまま佇み、斜陽を見つめている様子や、山水に遊ぶ詩では、重嶺や垂霞、川の流れや雨や雪を言うことなく、ほの暗く掩没し、幽妙で深淵なさまを表現している。これは千古のつかえがとれて胸がすくような、万人の眼福だといえよう。

これによれば、錢繼章にとっての最上の詩は中唐の韓愈であり、その次が皮日休・陸龜蒙、または宋の歐陽脩・蘇東坡である。錢繼章は明にも七子などの詩人はいたものの、鍾惺と譚元春が登場するまで人々は性靈の何たるかを知らなかったのだという。ここでは竟陵の詩は「千古の勝胸を開き、萬人の目福に資するに足る」と評価されている。

こうした文学史観に錢謙益が反撥した背景には、錢自身が程

嘉燧の影響で宋詩に傾倒するようになっていたことが関係して  
いよう。錢繼章「序友夏」の「其の才致を極むるも、宋人爲る  
に過ぎず」には、宋詩を格下に見る意識が反映されているよう。

「宋人の陸放翁爲れば、佳も亦た止まれり」には、陸游詩流行  
の風潮への牽制の意味が込められていたと考えるのは、あまり  
に穿った見方であろうか。錢謙益は錢繼章の「序友夏」に込め  
られた意図を正確に感知したからこそ、「論者」の説として彼  
の言葉を引用し、「南渡より以て隆・萬に迄るまで、將に五百  
年にならんとす、亦た皆な石人木偶ならんや」と反駁したので  
はないか。

『小伝』における譚元春批判の辞は、単に譚元春のみに向け  
て発せられたものではないことを再確認しておく必要があるう。

### (3) 陳子龍「答胡学博書」

ところで、そもそも錢繼章が竟陵派を弁護した背景には、  
「竟陵の門戸倒れ、香煙舊し」と言われる状況があったためだ  
が、反竟陵の中心となっただのはどんな一派だろうか。

手がかりとなるのが、先に引いた「譚元春伝」中の「呉中の  
少俊、多く鍾・譚を訾訾し、余深く為に護惜するも、虚心も  
て評鷺し、往復良や久しくして、已むを得ずして昌言撃排す」

という表現である。これによれば、この「呉中の少俊」は錢謙  
益に先駆けて「鍾・譚を訾訾し」ていたことになる。

これまでの流れで、「呉中の少俊」は呉中の公安派を指すと  
考えることもできる。なぜならば公安派の成立は、袁宏道  
(一五六八〜一六一〇)が万曆三二年(一五九四)に呉県の知県と  
して着任し、長洲知県の江盈科(一五五三〜一六〇五)が袁宏道  
に応和したことを契機としており、呉はその活躍の舞台であっ  
たからである。しかも第一章で掲げたように、「袁中道伝」に  
は袁宏道の末弟袁中道(一五七〇〜一六二二)が錢に対して漏ら  
した『詩歸』への不満の言が引用されており、袁中道は錢にと  
もに竟陵派を「昌言撃排」するように誘ったとある。しかし、  
三袁のうち最も若い袁中道ですら錢謙益よりも十二も年上であ  
り、錢謙益が「少俊」と呼ぶには当たらない。公安の末流でもあ  
り得ない。公安派は三袁の死後、急速に勢いを失い、もはや  
「少俊」を引き付ける詩論ではなくなっていたからである。

あるいは嘉定の四君子や海虞の二馮を連想する向きもあるか  
も知れない。しかし、四君のうち最も若い李流芳ですら万曆三  
年(一五七五)の生まれであり、錢謙益より八歳年上である。  
また、馮舒は錢より九歳、馮班は二十歳年下であるが、錢が竟



陵批判に転じた崇禎六年には錢が五十二歳、二馮はすでに四十一歳と三十二歳であり、二馮はもはや「少俊」とはいえない。

結論からいうと、論者はここの「呉中の少俊」は、錢より二十六歳年下の松江の雲間派を指すと考える。雲間派は陳子龍（一六〇八～一六四七）、李雯（一六〇八～一六四七）、宋徵輿（一六一八～一六六七）らの三子を中心にしたグループで、明末の幾社を母体とし、七子による古文辞派の流れを汲む。彼らが崇禎十六年（一六四三）に刻した『皇明詩選』十三巻は、二百名の詩人の一千二百首あまりの詩を録しているが、その大半は古文辞派の詩で、公安派についてはただ一首のみを収め、竟陵派の詩は一首も採録していない。<sup>22</sup>

次は『皇明詩選』にみえる竟陵批判である。

自是而後、雅音漸遠、曼聲並作、本寧・元瑞之儔、既夷其樊圃。而公安・竟陵諸家、又實之以蕭艾蓬蒿焉。神・熹之際、天下無詩者蓋五六十年矣。

（『皇明詩選』卷首李雯「皇明詩選序」）

（七子の活躍）以後、雅音はだんだん遠のき、曼声が興り、李維楨や胡応麟らがその園圃を整えたものの、公安派や竟陵派の諸家が、再び蕭艾や蓬蒿などの雑草を繁らせてしまった。万曆・天啓

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

の間、天下に詩が無いことが五六十年も続いた。

中郎淺俗、有元・白之屬、此詩彷彿初唐、鍾・譚猶未望見。

（『皇明詩選』卷六袁宏道「古荊篇」李雯評注）

袁宏道の淺俗は元禎・白居易の類に属するが、この詩（古荊篇）は初唐を彷彿とさせる。鍾や譚では到底望めないものだ。

特に注目されるのは、陳子龍が竟陵出身の人士にあてた「答胡學博書」である。

貴郷鍾譚兩君者、少知掃除、極意空談、似乎前二者之失、可少去矣。然舉古人所爲溫厚之旨、高亮之格、虛響沈實之工、珠聯璧合之體、感時托諷之心、援古證今之法、皆棄不道。而又高自標置、以致海內不學之小生、遊光之縉素、侈然皆自以爲能詩。何則、彼所爲詩、意既無本、辭又鮮據、可不學而然也。夫居薦紳之位而爲鄉鄙之音、立昌明之朝而作衰頹之語、此「洪範」所爲言之不從、而可爲世運大憂者也。

（『答胡學博書』「陳子龍集」卷十八）

あなたの郷里の鍾・譚の両君は、少し悪弊を払う必要を思い、空談に意を尽した。それで、前の二者の失（卑俗と艶麗―筆者注）をやや除くことができたかのようにみえるが、古人の温厚の旨、高亮たる品格、流麗と沈着のバランスの工みさ、玉を連ねたよう

な美体、時に感じて諷諭に託する心、古えの典故を今に援用する方法などは、すべて棄てて顧みなかった。そして自らを高みに置き、海内の不学の書生や、物見遊山の僧侶や俗人を陣中に引き入れた結果、みな大きな顔をして詩を作ることができると思い込んだ。何となればすなわち、彼らが作る詩には語意に基づく所がなく、文辞もまた典拠がなく、不学なればこそこうなったのだ。そもそも摺紳の位に在る者が田舎じみた卑鄙な韻律を作り、隆盛なる国家の朝廷に立つ者が頽廢した語を作る、これは『洪範』がいうところの言葉が従（順）でないことであり、世運の大憂とならべきものだ。

右の陳子龍の書簡に見える、竟陵派が公安派の卑俗と艶麗を洗い流したという詩観、そして竟陵派が「不学之小生」や「遊光之緇素」を自らの陣中に引き入れ、彼等がでたらめな詩を作るようになったという批判、さらに『洪範』を引き合いに出して竟陵の詩は「世運大憂」を招くものだという主張は、錢謙益が『小伝』で展開した「不学」「遊光掠影」「詩妖」といった議論と重なる部分が多い。錢謙益の『小伝』が陳子龍の論を敷衍した形になっていることは明白である。

ただし、一方で錢謙益が七子とその流れを汲む雲間派に冷淡

なことも事実である。そもそも『列朝詩集』は陳子龍ら雲間三子の詩を一首も収録しておらず、雲間派が推戴する七子の流れを汲む詩人も『小伝』では尽く排撃の対象となっている。たとえば、陳子龍が『皇明詩選』で「吾が郷の元成（馮時可）は、呉門の劉子威（鳳）に方うべし」と高く評価した馮時可は、丁集卷八「劉鳳伝」では、劉子威（鳳）ともに「剽賊の最下なる者」と否定され、「雲間の明詩を選せし者、元成を以て子威に配す。其の生平を夷考すれば則ち又た子威の重儷（奴隸の奴隸）なり」と糾弾されている。

このように、『列朝詩集』における錢謙益は古文辞の徹底的な批判者である。しかし、若い頃の彼は李夢陽や王世貞の諸集を暗誦するほど七子の学に傾倒していたし、中年以降、詩風を変化させたとはいえ、江南詩壇の領袖としての彼の名声は、詩派の垣根を越えて多くの詩人を引きつけた。また、柳如是をめぐる因縁を持ちだすまでもなく、錢謙益が若いころから才子の誉れが高かった陳子龍の言動に興味を抱かぬはずはなく、両者の間には早くから交遊があった。晩年、錢謙益は雲間出身の徐季白の詩に題し、次のように往時を回顧している。

雲間之才子如臥子・舒章、余故愛其才情、美其聲律。惟其

淵源流別、各有從來。余亦嘗面規之、而二子亦不以爲耳瑣。  
…如雲間之詩、自國初海叟諸公、以迄陳・李、可謂極盛矣。

〔有學集〕卷四十七「題徐季白詩卷後」

雲間の才子である陳臥子龍・李舒章など、私はもともとその才情を愛し、その詩歌を讚美していた。ただ淵源や流派については、おのおの異なるところがあった。私はかつてこれに面と向かって意見したし、二子もこれに耳栓したりはしなかった。…雲間の詩は、国初の袁凱ら諸公から陳臥子や李舒章に至るまで、極めて盛んだといえる。

以上のことを勘案すると、錢謙益が竟陵派批判に転じるより前に、竟陵派を攻撃していた「呉中の少俊」とは、やはり雲間の三子、特に陳子龍と李雯であったとするのが妥当であろう。錢謙益が「呉中の少俊」との面白い、氏名を明記しなかったのは、『列朝詩集』では古文辞の流れをくむ雲間派も批判の対象になっていたのであると思われる。

#### (4) 張可仕 佚文

「論譚元春詩」は、竟陵派の不学を強調するため、金陵の張文寺なる人物の言を引用して次のようにいう。

金陵張文寺曰、「伯敬入中郎之室、而思別出奇、斤斤字句

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

之間、欲闡古人之秘、以其道易天下、多見其不知量也。友夏別立蹊徑、特爲雕刻、要其才情不奇、故失之纖、學問不厚、故失之陋、性靈不貴、故失之鬼、風雅不道、故失之鄙、一言以蔽之、總之不讀書之病也。」

金陵の張文寺はいう、「鍾伯敬は袁宏道中郎から入り、そこから別に独自のものをしようとしたのだ。字句の間の意に細かくこだわり、古人の秘訣を聞かずに、その方法で天下を易えようとしたが、自らの力を知らないということを暴露したにすぎない。譚友夏は別の途を開き、ことさら文辞を雕琢したが、要はその才情が取り立てて抜kindでたものではなかったため纖弱に陥り、学問が足りなかったため卑陋に陥った。その性情が下劣であったため鬼趣に陥り、風雅を目標としなかったため鄙俗に陥った。一言でいうとしたら、すべて学問をしないゆえの病なのだ」と。

張文寺とは、金陵（南京）の張可仕（一五九一～一六六四）のことで、字を文寺または文時といい、号は紫澗老人。崇禎五年（一六三三）のいわゆる呉橋の兵変（明の將軍の孔有徳が呉橋で叛乱を起こした事件）で国に殉じた張可大の弟にあたる。『擊磬集』『落葉哀蟬集』『願不願集』などの別集があり、『明布衣詩』一百卷や『南樞志』一百七十卷を編纂したと伝えられるが、現存

するのは、『南枢志』の残巻のみである。錢謙益の「明士張君文時墓誌銘」(『有學集』卷三十一)によれば、七、八歳で『楚辭』を朗誦した秀才で、名士の傳速度や茅止生と交遊があった。文時の家は鍾山の南にあり、家に図書が満ちていたという。

『列朝詩集』丁集卷十「張如蘭伝」には「次子の文時 才名有り、明詩を集録し、風雅を別裁す。余の采詩に助け有り」とある。張可仕が『列朝詩集』編纂に寄与したことは確からしい。

このほか、丁集卷十六「紀青伝」にも「余詩を留都に采るに、紀の友 張文寺 出だして以て余に示す、徐穎自り以下の五人は、皆な文寺の論次なり」とある。具体的には、丁集卷十六の徐穎の六首、廖孔説の二十七首、紀青の十七首、周楷の四首、傅汝舟の三首は、張可仕が編次したものである。

『列朝詩集』丁集卷四の「皇甫冲伝」には張可仕の評が引用されている。四人兄弟の長男でありながら一人だけ科挙に及第できなかった皇甫冲について論じたもので、「金陵張文時曰、四甫之才、子浚爲冠、亦闡幽之論也(金陵の張文時は四人兄弟の中で皇甫冲子浚の才が一番だという。埋もれたものに光を当てた論だ)」とある。自ら布衣として生きた張可仕らしい批評の言といえる。

#### (5) 朱隗『明詩平論二集』評語

「論譚元春詩」は最後に、かつて竟陵派に心酔していた朱隗が、鍾惺と譚元春の詩を誇った言葉を紹介して竟陵派批判の結びとしている。

吳門朱隗曰、「伯敬詩『桃花少人事』、詆之者曰、李花獨當終日忙乎。友夏詩『秋聲半夜真』則甲夜乙夜秋聲尚假乎。」雲子本推服鍾・譚而其言如此。

吳門の朱隗はいう、「鍾伯敬の詩に『桃花人事少なし』とあり、これを詆る者は、李花だけが終日忙しいわけではあるまいという。友夏の詩に『秋聲半夜真なり』とあるが、ならば甲夜や乙夜の秋聲は偽物ということになるうか」と。朱隗雲子はもともと鍾・譚に推服していた者なのに、彼でさえこのように言っているのだ。

この引用文の典拠は、朱隗『明詩平論二集』卷十の譚元春「秋夕集周安期陶公亮陳則梁趙彦琢胡用涉金正希柏鸞堂看月」中の句「秋聲半夜真」に対する朱隗の批評である。

錢謙益が朱隗の評語を引用したのは、本来竟陵派であった彼ですら、譚元春詩を誹謗しているということに影響づけるためである。ところが実際の朱隗の評語は、『小伝』に示されたものとは少しニュアンスが異なる。

最是竟陵習語、不恨清態、正坐浮耳。詆之者常舉伯敬「桃花少人事」、謂李花當獨終日忙乎。今云「半夜真」則前此後此、秋聲尚假。論詩不必如此戲謔、要之率爾語亦當簡括、病在不鍊。○若唐人「海靜月色真」、自有悟境、但襲用此等字句、最爲疏庸淺學人便徑。大抵一涉習氣、王李鐘譚、墮落則一。

これは竟陵の常套語の最たるもので、清態なのはいいとしても、浮誇になってしまっているのだ。これを誘る者はいつも伯敬の「桃花 人事少し」の句を挙げつらい、李の花だけが終日忙しいのかなどとと言う。(この言い方に倣えば)今、「半夜真なり」なら、半夜の前と後の秋声は偽物かということになろう。詩を論じるのにこんな戲謔を用いるべきではないが、要するに率爾の語は簡潔得要を得たものであるべきで、よく鍊らないと弊害をもたらす。○唐人の「海靜かに月色真なり」(王昌齡「送韋十二兵曹」一筆者注)などは、独自の悟境があるが、これらの字句だけを襲用するというのは、最も疏庸浅学の者の安直な作詩法だ。だいたい一たび習気を蒙ると、王・李だろうが鐘・譚だろうが、ひとしく墮落してしまうのだ。

『明詩平論二集』の評語と『小伝』の引く朱隗の語とを比べ

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

ると、朱隗が意図するところと錢謙益の引用の文意にはズレがあるのがわかる。朱隗の意図は卒爾に思いついた言葉を十分鍊らないまま詩語として使用することの病を論じることにある。鍾惺の「桃花 人事少し」の句をあげつらう者の言い方を真似て、「半夜でない夜の秋声は偽物か」と表現したのは、あくまで戲謔であって、朱隗自身、論詩にこの手の戲謔を用いることの不謹慎を十分自覚したうえで議論を進めている。ところが『小伝』の文脈では、朱隗自身がこの諧謔を発したことで、竟陵派批判にまわったかのように読みが限定されてしまっているのである。

朱隗(生卒年未詳)は明末清初の人で、字を雲子といい、長洲の人。天啓四年(一六二四)ごろ蘇州にて張傳や張采とともに後の復社の前身となる応社を結成した。竟陵派に近く、譚元春の詩文集のうち最も流布した『新刻譚友夏合集』二十三卷本(崇禎六年の刻)には、卷二の評者として彼の名が挙がっている。張沢の「新刻譚友夏合集序」は「十年以來、輒ち(朱)雲子・(徐)九一と與に真隱を搜剔し、奥會に博通した」という。つまり、朱隗は譚元春の詩に最も精通していた人物といえる。

朱隗の『明詩平論二集』二十卷は、崇禎十七年(一六四四)

の刻で、天啓元年（一六二一）から崇禎十七年春までの二百八十四人の詩を収録した明詩の総集である。その選録は「八公平」を旨とし、特定の詩派に拘泥することなく、同時代の詩を幅広く集めている。<sup>24</sup>今、四十首以上採録されている詩人を採録数の多い順に並べると、陳子龍の六十一首を筆頭に、陳繼儒五十九首、陳名夏五十首、それに鍾惺四十七首、王思任四十七首、葛一龍四十四首、錢謙益四十三首、沈德符四十一首、譚元春の四十首と続く。雲間派の陳子龍が最多とはいえ、この九名のうち、鍾惺、譚元春、王思任、葛一龍、沈德符の五名は竟陵派の詩人である。

『明詩平論二集』が全体として、鍾惺や譚元春の詩をどのように評価していたかを見るため、その一部、巻二の五言古詩の批評例を左に示しておく。

## 鍾惺詩

## ○「歸州峽」評語

手眼清透、不假雜色點綴、而自然如畫、所謂百鍊正在此（作詩の手法が清透で、色を雜じえた描写に頼らずして自然に絵画のようになっていいる。いわゆる百鍊がまさにここにある）。

## ○「飛雲巖」評語

讀此等詩、不得不服其心靈手妙、效嘆之流、從何着脚（これらの詩を読むと、その心靈手妙に感服せざるを得ない。響に効う輩には決して真似ができない）。

## 譚元春詩

## ○「謝彦父吉父陸舟亭」評語

從子瞻凌虛台記脱胎、筆興超妙、不挂一塵（蘇子瞻の「凌虛台記」を換骨奪胎したもので、興趣は超妙、全く俗塵に穢されていない）。

○「劉濟甫持顏魯公浯溪碑見贈是其先人景垣文學遺物展觀之暇率有所感」評語

此首詩與「詞人凡九變」一篇、言文章藝術之道、蘊含精切、本領最大。豈尋常才藻人可及。于此等詩過目不辯、而漫然隨世訾議竟陵、何弗思之甚也（この詩と「詞人凡九變」の一篇（譚の別の詩を指す）とは文章藝術の道を述べたもので、蘊含精切にして、本領が最大限發揮されている。尋常の才藻の人が及ぶものではない。これらの詩を見てもわからず、漫然と世の風潮にしたがって竟陵を訾るのは、なんと思慮のないことよ）。

## ○「天啓元年復出應試呈甫田周學使者」評語

以家常瑣屑尺牘委密語入詩、而不傷風雅、柔厚近人、胸懷

如見。此體亦竟陵所獨（日常の瑣事や尺牘に用いる細々した詞が詩に入りこんでいるのに、風雅を損なわず、柔厚で身近、胸の内が立ち現れるかのような）。この体も竟陵の独得のものだ。

『小伝』は「雲子は本と鍾・譚に推服するも其の言此くの如し」と、まるで朱隗がすでに竟陵派を脱したかのようというが、論者が確認した限り、評はむしろ右のようにほとんどが賞賛の語であって、鍾惺や譚元春の詩を悪しざまにいう評語は少ない。唯一、「秋聲半夜真」の一句を「竟陵の習語」としたのは例外といつてよく、その句評がたまたま断章取義的に『小伝』に引用されたにすぎないのだ。

朱隗の文集は今日に伝わらず、朱隗の文学思想の変遷をここで論じることとはできない。朱彝尊『静志居詩話』巻二十一は「雲子際鍾譚盛行之日、唱酬吳下、遙應南風（朱雲子は鍾譚体が盛行のころ、吳で詩を唱酬し、彼らの楚風に応和した）」という一方で、彼の「論詩」と「贈陳玉立長歌」を引いて、「於景陵非中心誠服可知（竟陵派に対して心の底から心服していたのではないことがわかる）」と述べている。ただし、朱彝尊もまた竟陵詩の批判者であり、その立場からの発言であることを附言しておく。

### おわりに―呉声の復権のために

『小伝』本文が引用している資料が、本来必ずしも全て竟陵派批判として書かれたものではないことは、以上検討してきたとおりである。錢謙益の竟陵批判の言辞には、各所からの恣意的な引用が含まれており、その解釈には注意が必要である。

ただし、彼が依拠した竟陵派批判の言辞がすべて呉人のものであることは重要と思われる。最後に、竟陵派批判は、錢謙益にとって呉風を守るための闘争でもあったことを述べて、まじめに代えておきたい。

錢謙益の呉人としての意識が鮮明に出ているのは、唐寅・祝允明・文徵明とともに呉中の四才子と言われながら、進士及第後、北地の李夢陽の古文辞に傾倒した徐禎卿の『小伝』である。其持論、於唐名家獨喜劉賓客・白太傅、沈酣六朝、散華流豔、「文章烟月」之句、至今令人口吻猶香。登第之後、與北地李獻吉游、悔其少作、改而趨漢・魏・盛唐、吳中名士頗有「邯鄲學步」之諺。

（丙集卷九「徐禎卿伝」）  
彼の持論では、唐名家では劉賓客と白楽天を好み、六朝詩に親しんで、散華のように流豔な詩を作り、「文章烟月」などの句は今

に至るまで人の口吻にその余香が漂っている。しかし登第の後、北地の李献吉夢陽と交際するようになり、若い時の詩作を悔い、それを改め漢・魏・盛唐の模擬に走った。呉中の名士はこれを「邯鄲学歩」と誇った。

「邯鄲学歩」とは、邯鄲の人の歩く姿が優雅で、燕国から出てきた青年がそれを真似たものうまいか、最後には本来の歩き方をも忘れてしまったという『莊子』秋水篇の故事である。ここでは徐禎卿が進士及第後に北京で李夢陽と識り合い、呉の伝統を棄てて古文辞に傾倒したことを指す。

錢謙益は明における呉の文学の流れを次のように説明する。

本朝呉中之詩、一盛於高・楊、再盛於沈・唐、士多翕清煦鮮、得山川鈞綿秀絶之氣。然往往好隨俗尚同、不能踔厲特出、亦土風使然也。徐昌穀、江左之逸才也。一見李獻吉、陽浮慕之、幾欲北面、至今為諸僮口實。皇甫子循歌詩婉麗、晚年盛稱嘉靖七子、非中心好之、屈折於其聲光氣焰耳。邇來呉聲不競、南辱於楚。〔初學集〕卷四十一「孫子長詩引」

本朝の呉中の詩は、まず高啓・楊基、次に沈周・唐寅によって盛んになった。士が多く集い、日の光は清らかかつ暖かで、山川の鈞綿秀絶の氣を得ている。しかし往往にして俗に流され他に同調

するのを好み、奮起して突出することができない。徐昌穀貞卿は江左の逸才だったが、ひとたび李献吉に会うや、舞い上がってこれを慕い、幾んど北面せんばかりになり、今に至るまで北の田舎人士の語り草となっている。皇甫子循仿の歌詩は婉麗だったが、晩年盛んに嘉靖七子を誉めた。衷心から彼らを好んでいたのではなく、その光につつまれた名声や気焰に屈しただけだ。邇來、呉声は振るわず、南の楚に辱められている。

呉の詩が北地に呑み込まれることで、古文辞派の猖獗を招いたという錢謙益は、呉地が竟陵派＝楚風に毒されつつある現状をなんとか打破したいと考えていた。かくて、攻撃の矛先は呉の出身でありながら、楚門に降った詩人にも向けられていった。たとえば、呉の洞庭山の葛一龍（一五六七～一六四〇）字は震甫は、明末清初、五律の名手とされた詩人であり、先の『明詩平論二集』でも五律の収録数が二十七首と群を抜いた存在である。朱隗の五律評は、「五律は奇を尚ばば則ち格を傷う。平を尚ばば則ち秀を失う。惟だ震父は能く奇句を平調の中に入る。

此の間の消息、三十年の苦吟の功に非ずんば此れを語るに足らざるなり」とし、その岑嘉州を思わせる詩風は「一時効いて之を爲す者、亦た數家を下らず」だったという。『列朝詩集』は



葛一龍の詩を六十八首と多数収録するものの、その内容は錢謙益が「呉の後賢をして自ら樹たつる所以を知らしむ」ために「晩年の變調（楚調）を祓除し」たものにすぎない。

『小伝』は、この葛一龍を徐禎卿に擬える。

已而漸長、筆漸放、楚人譚友夏之流相與尊奉之、浸淫徵逐、時時降爲楚調、人謂震甫之咻于楚、猶昌穀之移于秦、可爲一喟也。

（丁集卷十四「葛一龍伝」）

長じてくると、筆致はだんだん放縱になり、楚人の譚友夏といった流輩と尊奉しあい、招いたり招かれたりにつきあいにどっぶり浸かり、しばしば楚調に降った。人は葛震甫が楚調を咻まもるのは、まるで徐昌穀が北地の秦風へとなびいたようなもので、嘆かわしいといった。

錢謙益は、前章で紹介した呉の朱隗のために詩集の序文「朱雲子小集引」を贈っており、そこにはこれまで輕佻浮薄、信義に欠けると蔑まれてきた呉の復権を希求し、友人を竟陵から脱却させようとする錢謙益の姿がある。

今之才人、無如雲子。其才情繁富、纏綿絡繹、良可爲昌國伯虎之流亞、…史稱大江之南、五湖之間、其人輕心。晉人言吳音妖而浮、故曰其人巧而少信。昔奪于秦、中服于齊、

『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造

今咻于楚、此其徵也。雲子年富力強、以吳之文自立、一洗輕心少信之耻、余日望之。

（『初學集』卷三十二）

今の才人で、雲子にかなうものはいない。その才は豊かで、纏綿として絡繹、まことに徐昌國・唐伯虎の流れを継ぐものといえる、  
：『史記』は、大江の南、五湖の間の人は輕薄だという。晋人は呉声は妖にして浮だとし、ことさらに呉人は巧にして信少なしという。（呉人は）昔、秦の李夢陽に声を奪われ、中盤で齊の李攀龍に服し、今は楚調をさえずる始末で、これこそはその徵だ。朱雲子は春秋に富み力もある。彼が呉の文を自立させ、輕薄だとか信少なしといった恥ずべき評判を一掃してくれるのを私は日々待ち望んでいる。

明一代を見渡したとき、錢謙益には秦風や楚風の席卷する詩壇で、呉風はついに中心たりえなかつたという苦しい思いがある。  
『小伝』の竟陵派批判は、彼にとって呉声復権のための旗幟であつたと考えられよう。

1 『四庫全書総目提要』集部四三総集類五「明詩綜一百卷」參照。

2 四庫全書は、『詩歸』五十一卷のほか譚元春の別集『岳陽堂集』

十卷、『譚友夏合集』二十三卷、『譚子詩歸』十卷をすべて存目に置いている。なお、鍾惺の別集『隱秀軒集』は禁燬書である。『軍機処奏准全燬書目』に「惺詩文織僞詭僻、破壞風氣、本無足取、詞句内亦有悖犯處、應請銷燬」とある。

## 3

錢謙益の竟陵派批判に関する論文としては、孫之梅「鬼趣・兵象―錢謙益論竟陵派」(『内蒙古師大書報(哲学社会科学版)』一九九七年第一期)、嚴志雄「錢謙益攻排竟陵鍾・譚側議」(『中國文哲研究通訊』第十四卷第二期二〇〇四年六月)、李先耕「錢謙益論鍾惺發微」(『文芸研究』二〇〇六年第十二期)、王鏡容「文学批評有情天・錢謙益対鍾惺之情誼与攻排探微」(『清華中文學報』第三期二〇〇九年十一月)、張爽「錢謙益排擊『竟陵鍾・譚』与『列朝詩集』編纂旨意」(『故宮學刊』二〇一三年第一期)があるほか、錢謙益の研究書である丁功誼『錢謙益文学思想研究』(上海古籍出版社二〇〇六年)、孫之梅『錢謙益与明末清初文学』(增訂版)(山東大学出版社二〇一〇年)、楊連民『錢謙益詩学研究』(社会科学文献出版社二〇〇七年)、竟陵派の研究書である鄒國平『竟陵派与明代文学批評』(上海古籍出版社二〇〇四年)、陳広宏『鍾惺年譜』(復旦大学出版社一九九三年)、同『竟陵派研究』(復旦大学出版社二〇〇六年)などにも論及がある。ただし、管見の及ぶところ、『小伝』が引用する原資料を考証して論じた研究はない。

4 「題懷麓堂詩鈔」(『初学集』卷八十三)でも竟陵派の流行を「鬼病」と評する。

## 5

「詩妖」の出典は『洪範五行傳』。『漢書』五行志中之上に「傳」(『洪範五行傳』一筆者注)に曰く、言の従ならず、是れを文(文)まらずと謂う、厥(そ)の咎めは僭、厥(そ)の罰は恆陽、厥(そ)の極は憂。時に則ち詩妖有り、時に則ち介蟲の孽有り、時に則ち犬豕有り、時に則ち口舌の痾有り、時に則ち白青白祥有り。惟うに木(そ)金を沍(そ)う」とある。

## 6

このほか黄宗羲『南雷文定』附録として収められている錢謙益の書簡にも、「國家の多事自り以來、毎に謂う三峰の禪、西人の教、楚人の詩は、是れ世間の三大妖孽と。三妖除かれずんば、斯世必ず陸沈魚爛の禍有りと。今不幸にして言中れり」とある。なお、孫中旺「錢謙益集外佚文『三居詩引』考論」(『圖書館雜誌』二〇一四年第一期)によれば、徐州圖書館現蔵の漢月法蔵の詩文集『三峰蔵禪師山居詩』一卷には万曆末の作と思われる錢謙益「山居詩引」が冠されているが、これは『初学集』に収録されていない佚文であり、錢仲聯整理の『牧齋全集』にも未收入という。孫中旺は『初学集』編纂の際に錢が故意に収録しなかった可能性を指摘する。

## 7

李聖華「清初人論竟陵派平議」(『鄭州大學學報』第四十卷第五期二〇〇七年)参照。

「姚叔祥過明禿堂共論近代詞人戲作絕句十六首」(『初學集』卷十七)第十五首「王績鄉人笑子虛、兔園典冊竟何如、憑君若問金條脫、解道『南華』是僻書」。今『唐詩歸』卷一をみるに王績(東臯子)「在京思故園見鄉人」の數首後に朱仲晦「答王無功思故園見鄉里人問」が載録されている。

9 たとえば竟陵派嫌いの顧炎武は『日知錄』卷十八「改書」に「又近日盛行『詩歸』一書、尤為妄誕」として、魏文帝「短歌行」にある「長吟永歎、思我聖考」の聖考は父の武帝を指すにもかかわらず、『詩歸』は「聖老」に作り、これを「聖老の字奇なり」と稱賛していることなどをあげつらっている。

10 錢謙益の「答唐訓導汝謫論文書」(『初學集』卷七十九)にも同様の話が引用されるが、袁中道の『珂雪齋集』にこの辞は見えない。

11 『錢注杜詩』に関する研究としては、陳直珊『錢注杜詩』研究(『學苑出版社』二〇〇一年)が最も詳しい。

12 陳寅恪は『柳如是別傳』第五章「復明運動」で、錢謙益と鍾惺が同年の進士であったことが影響していると言う。

13 陳直珊『錢注杜詩』研究(『學苑出版社』二〇〇一年)は「友夏詩、貧也」で始まる譚元春詩への詆排の語を、「譚元春伝」の最後に続く程嘉燧の評語として解釈するが、これは錢陸燦が康熙三十七年(一六九八)に「小伝」のみを抽出して刻行した

『列朝詩集小伝』に拠ったがゆえの誤りである。

14 徐波は字を元歎といい、呉県の人。鍾惺、譚元春、錢謙益の共通の友人で、三者ともその詩集の序文を執筆している。その詩は竟陵に近い。晩年、郷里の天池落木庵に隱棲した。室名は譚元春の命名による。『列朝詩集』の編纂にも協力していたことは、丁集卷十三下の「周永年伝」に「今其の詩を録し、八首を得たり、元歎の手定する所なり」とあることから知られる。

15 鄒国平『竟陵派与明代文学批評』(上海古籍出版社二〇〇四年)第六「錢謙益与鍾惺關係論說」参照。

16 廖正華「論明末清初文人对竟陵詩派的評價」湖南科技大学二〇〇九年 碩士論文。

17 王鏡容「文学批評有情天…錢謙益对鍾惺之情誼与攻排探微」(『清華中文学報』明清詩文特輯二〇〇九年十二月)。

18 丁功誼『錢謙益文学思想研究』(上海古籍出版社二〇〇六年)、孫之梅『錢謙益与明末清初文学(增訂版)』(山東大学出版社二〇一〇年)、蔣寅「陵游詩歌在明末清初的流行」(『中國韻文学刊』第二期二〇〇六年)などを参照。

19 ただし、朱彝尊『静志居詩話』卷十八程嘉燧は、「孟陽格調卑卑、才庸氣弱、近體多於古風、七律多於五律、如此伎倆、令三家邨夫子、誦百翻兔園冊、即優為之、奚必讀書破萬卷乎」

と手敵しい。

- 20 『人琴集』の名は、「人琴俱亡」（『世説新語』の王徽之が王献之の死を悼んだ語）に基づく。論者が閲覧した北京国家図書館蔵本には刊記がないものの、布衣であった者たちの遺稿を集めて刻した意図を考えるならば、刻年は錢繼章が自ら遺民として生きる決意をした明滅亡（一六四四）から『列朝詩集』の編纂が終わった順治六年（一六四九）までの清初の数年間に限定されよう。

- 21 ここでいう性霊とは性情にもとづく詩。真詩ともいう。譚元春「詩歸序」に「夫真有性靈之言、常浮出紙上、決不與衆言伍」と説明されるものである。

- 22 陳書録「陳子龍等〈皇明詩選〉所選作家篇目分体一覽表」「明代詩文的演變」（江蘇教育出版社一九九六年）参照。

- 23 『明詩平論二集』「笈凡」によると、二集と名づけたのは、洪武から万暦までの詩を一集とし、三集を補遺とする予定があったためである。

- 24 朱隗は「明詩平論序」に次のようにいう。「明興詩道大振、當其盛時、或云能超逾宋元、而上逮漢魏盛唐、中一變而詭卓、再變而虛秀、近乃稍復嘉隆風氣。要之一代之著作、彙而録之、可以云大觀已。隗自二十餘年以來、頗裒輯諸篇、有明詩選。平論之役謬為評次。間采前人所言、而斷以己意、隨類傳會。

其或偶有當於情與法之間者、則未可知。要即有起而訶之者、亦寧無說而處此哉。其於高亮與幽靈二家、即不必兩救、而自可並行、固將取其至庸而不可易者、以俟情與法之自定。蓋寄當與（與「字、一作「于」）人心、而不敢執一說而強天下以必從、亦庶幾取平焉爾已」。

- 25 これをテーマとした論文として、周興陸「錢謙益与吳中詩学伝統」『文学評論』二〇〇八年第二期がある。

※本論文は、科硏費硏究基盤硏究(C)26370407「錢謙益の『列朝詩集小伝』に関する実証的硏究」の成果の一部である。

# 『神境記』攷

## ——劉宋期の地志における山水の記録

大 平 幸 代

### はじめに

ここに取り上げるのは、編者も確定できない、つとに散佚した書物である。名を『神境記』という。『神境記』は、『隋書』経籍志にはみえず、類書に数条の佚文を遺すのみ。志怪に類した書名だが、佚文によれば、「神境」たる場所の地志の形態をとっているようである。

南朝で地方志が発達したことはよく知られている。『隋書』経籍志によれば、斉の陸澄が百六十家の説を集めて『地理書』を編み、続いて任昉が八十四家を増して『地記』を編纂した。陸・任二書に収められたもののうち、『隋書』編纂時に単独で世に行われていたのは、それぞれ四十二家と十二家。唐初には、実に八割近くの書が失われていたことになる。東晋から宋齊に

かけて、大量の、おそらく多様な地志が生まれながらも、ほどなく散佚していったのである。

『神境記』という書物も失われた地志の一つだと思われ、その実態は杳としてうかがいしれない。管見のかぎりでは、この書の内容にまで言及するのは、小尾郊一氏のほかない。<sup>①</sup>

「神境記」は、幽邃の山中の仙境の記であろうか。……かかる幽邃の境地のみを対象とすることは、当時の神仙隱遁思想と連なるものであること言うまでもなく、それは遊覽思潮とも連なるものである。つまり作者がかかる神境を求めて遊歴した結果が、「神境記」となったものであると考える。

このように小尾氏は、当時流行した神仙隱遁、山水遊覽の風潮の延長線上に『神境記』を置く。確かに、『神境記』に描か